

なぜ33歳で開業？ 若手医師が語る「独立までのリアル」-渡邊功・iこころクリニック日本橋院長に聞く◆Vol.1

インタビュー 2021年8月14日(土)配信 庄部勇太 (m3.com契約ライター)

医局離れが進み、医師の独立志向が高まっていると想像される今。精神科医の渡邊功氏は2019年12月、33歳で東京・日本橋にクリニックを構えた。医局を離れることに不安はなかったのか、なぜ若くして開業したのか。開業までの困難と重視したことは、収入を増やしたい思いはあったか。若手医師に「独立までのリアル」を語ってもらった(2021年7月8日にインタビュー。全2回連載)。

——クリニックの概要や先生が開業した経緯は、「m3.com東京都版」に書いたので割愛します。先生は33歳で開業し、若くして医局を離れました。不安はありませんでしたか。

それはありました。医局にいることでつながれる人が多くいるので、大学の教授など専門性の高い医師とのネットワークが希薄になることは不安でした。個人的にも良くなってくれた人がいましたし、彼らとのつながりが切れてしまう可能性があることも気になりました。

ただ、開業への好奇心と不安感を比べたとき、前者が上回りました。私には医師として診療の自由度を高め、開業医としていろいろな世界を見たい思いが強くありました。医療をサービス業として捉えたとき、その提供先の裾野を広げたいとも考えていました。大学病院には症状の重い患者さんが多く訪れますが、精神科領域では軽症の人の方が数は多いわけです。そこになかなか触れられないのは「ちょっと実態とは離れているのではないか」と。「サービスの貢献度としてはどうなんだろう。自分の価値観とは違うかな」という気持ちでした。

開業した結果、人的ネットワークの希薄化は心配していたほどではありませんでした。医局にいたころに交流していた先生方とは今も関係が続いていますし、中には私の後に開業した先生もいて、そんな方とは同志のような感覚で以前よりも密にやり取りしています。今はSNSもありますし、隔たりはあまり感じていないですね。



渡邊功院長

——「33歳」というタイミングに理由はあったのですか。

私にとっては自然なタイミングだったと思います。後期研修で大学病院と出向先の民間病院に勤務し、その後にクリニックに勤めたことで、一通り今ある医療機関の形態を経験しました。大学病院では重症者、クリニックでは軽症者というように、そこに訪れる特徴的な患者さんへの診療経験も積めたと感じました。

ポイントだったのは、クリニック勤務です。後期研修を終えて医局を離れた時にはもう開業を考えていたわけですが、開業したらずっと外来診療を続けていかななくてはなりません。「果たしてそれができるかな」と。それまでに週に2回の外来は経験していましたが、週に5回できるか試すためにクリニックに移りました。勤務医の友人の中には、「体力的に外来を週5はできないよ」と話す人が結構いるんですよ。

それで、神奈川県精神科クリニックで1年半ほど働き、「これはいけるのではないか」と思ったので独立に踏み切りました。クリニックに訪れる軽症の患者さんの場合、治療によって薬を減らしたり、なくしたりできることが多いのも大きな発見でした。良くなるケースが多いのはやはり医師としてはモチベーションになります。

——開業までの手続きの中で「これは手間取った」ということは。

融資を受けるのにちょっと苦労しましたね。2つの地方銀行から断られました。私は妻と3人の子どもがいて、住宅ローンのある持ち家に住んでいます。さらに、資産形成のために不動産を運用しているので、これらをリスクとみなされたのでしょうか。いずれも税理士の方から紹介された銀行でしたが審査が下りませんでした。結果的に不動産運用で付き合いのあった別の地銀が医療分野への融資に力を入れていることを後で知り、借りることができました。

医師は融資を受けやすい職業だと思うので、私の場合はレアケースではないでしょうか。借りた額は6000万円ほどです。精神科は他の診療科に比べて機器が少ないので、医師が開業に当たって借金する額としてはそう多くはないでしょう。私の場合は開業にかかるお金を全て融資でカバーできましたが、融資を受けるに当たってはある程度の貯金も必要になると思います。私のように借り入れがなければ、数百万円ほどで問題ないのではないのでしょうか。

——インターネットで調べたところ、開業支援会社の協力を得たようですね。

はい。どんな人に協力してもらうかは気を使いました。医師の開業に当たっては一つの会社や一人の人をつてにさまざまな業者を紹介してもらえらる傾向がありますが、下手をすると芋づる式に危ない目に遭う恐れもあります。開業医の仲間からは「内装が滞った」「計画通りに進まなかった」「騙されて裁判沙汰になりそう」と聞いたことがあるので、人をよく見るようにしましたね。

私は、開業支援も兼ねる医療ポータルサイトなどを通じて10社くらいに話を聞き、その中からパートナーを選びました。開業を支援してくれる会社は不動産会社や内装業者、税理士などさまざまであり、最終的には薬局を運営する会社に頼みました。選んだ理由は精神科クリニックの開業支援実績が豊富であり、デイケアやリワークプログラムの立ち上げにも携わったことがあることです。薬局を運営している特性上、開業場所が限定される縛りはありましたが、無料でいろいろなことを相談できた点も魅力でした。内装業者も開業した医師に相場を聞いたり、その開業支援会社に相談したりして自分で選びました。

——開業理由に「医師として新しい世界を見たかった」と話していましたが、開業することで収入を増やしたい思いもありましたか。厚生労働省が2019年に実施した「第22回医療経済実態調査」では、一般病院の勤務医の平均年収が約1491万円で、一般診療所（入院診療収益なし）の院長のそれが約2699万円と1000万円超の開きがあります。

「なかった」と言うとう嘘になるかもしれませんが、そこは深く考えてなかったですね。「増えるといいな」くらいでした。精神科での患者単価は分かるので、「これくらい診ればこれくらいの収入が見込めるだろう」とは想像しましたが、勤務医時代にクリニックで診ていた人数は1日に20人ほどで、それ以上の患者さんを診る経験はありませんでしたし、そもそも、開業したとしてたくさん患者さんが来てくれるかは分かりません。

私は勤務医時代、開業資金への不安もあったので馬車馬のように週7で働くことも多く、当直も結構やっていました。それで年収は2000万円ほどでしたが、この「常勤医収入プラスアルバイト代」を開業医としての外来だけで賄えれば「ひとまずオッケー」という考えでした。現在のクリニックの来院数は1日50～60人ほどで、「思ったより診られるものだな」と実感するとともに、報酬も予想より上がる印象です。開業してから徐々にアルバイトも辞めることができおり、今年度は勤務医時代より収入は増えるのではないのでしょうか。

◆渡邊 功（わたなべ・いさお）氏

2012年福島県立医科大学卒。国立国際医療研究センター国府台病院や北里大学東病院、神奈川県のおひさまクリニックセンター北などへの勤務を経て、2019年、iこころクリニック日本橋を開院した。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

